

音楽科教育における「学び」の在り方 —「生きる力」の基盤となる学びの構造—

所属校：羽村市立羽村第二中学校
氏名：浜中伸良
派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：思考・行為・感情・言語活動・対象

I 研究の目的

1996年中央教育審議会答申において登場してきた「生きる力」という考え方は、新学習指導要領においても引き続き踏襲されることとなった。私たちは、今敢えて、「生きる力」ということを山積する課題の頂きに掲げた意味、あるいは、この言葉を選び出してこざるを得なかった意味を思わねばならない。

東京都教育委員会は、「社会状況や子供の変化等を背景に、・・・今までの経験や方法では対応しきれない状況が生まれてきている。」と、現在の学校を取り巻く状況についての厳しい認識を示している。²

このようなことは、私たち教員が、日々に繰り返している実践の中で切実に思うことである。他ならぬ私自身もまた、繰り返し突きつけられる事態に困惑し、動揺し、自らが拠って立つべき足元から、根本的に問い直さざるを得ない状況に迫られていたのである。

今まさに、学校現場に突きつけられる過酷な現実に晒されている私たちの一人一人に、「生きる力」といった根源的なものを問い直し、それに答えることを迫られているのである。

当然のことながら、このことは教科教育のこれまでの在り方に対しても、問い直しを迫られているのであり、「生きる力」へとつながる新しい学力観に立った、授業構想のための原理が求められているのである。

以上のような考えに立ち、「生きる力」の基盤となり得る、音楽科教育における「学び」について、その構造を明らかにすることを本研究の目的とする。

II 研究の方法

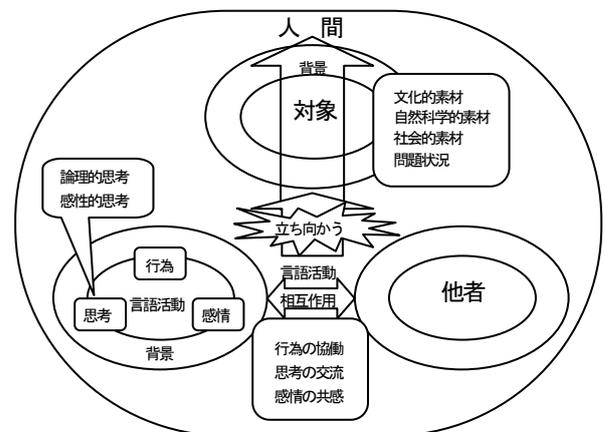
研究を進めるにあたり、私はまず十数年にわたる自身の実践を、研究主題に関わる先行研究や幅広い文献等から省察するとともに、教職大学院の授業からより広範な知見を得、さらに実地研究として、幼稚園から小学校、そして中学校へと育ちつつある子どもの生き、学ぶ具体的な姿を捉え、考察を加えながら、人間が人間として「生きる力」を考えていくための視点を明らかにする。

その上で、「生きる」ということの上に関わる、音楽

科教育の「学び」の構造を明らかにし、具体的な授業実践への根拠とするための理論的枠組みを確立する。

III 研究の結果

私が1年間をかけて描いた学びの構造は、以下のようなものである。



(1) 論理的思考と感性的思考

私たちがいる問題状況に直面した時、その事態を把握し、事態の打開を図る方策を練るのは思考の力による。私たちは問題状況の中に自らを投げ入れ、思考において自らを試し、未来に向かって前進するのである。「知識基盤社会」において、主体的に思考する態度を育て、思考力の向上を図ることはより一層重要である。

人間における思考の様態は複雑だが、私は大きく論理的思考と感性的思考の2つの思考様式に大別できると考えた。これらの2つの思考様式は、両者が相補的に働き合うことによって、はじめて意味の十全な把握が可能であるものと考えられる。

(2) 思考と行為

思考という内部世界は、身体という通路を経て、すなわち行為によって外部に開かれ、試されていく。小島が「外界との相互作用によって外界を知っていくのである」³とるように、行為によって思考は外界との相互作用の機会を得、観念はそこではじめて具体性を持ち、生き生きとした現実味を帯びるのである。

外界の現実には時に内界への自己更新を迫り、思考を発展・充実させる契機となる。また一方、思考の発展・充実、行為をより適切にし、行為の質を高めていく

ことに働く。このようにして、行為は思考の発端であり、また帰結でもある。私たちは、思考と行為の相互作用によって成長し、事態を新たに切り拓きながら「生きる」のである。

(3) 感情

身体性を伴って外部世界に表れてくる内部世界の要素には、思考の他に感情がある。感情は、ただそのままでは行為というより反応、表現というより表出であると言えるかも知れない。しかし敢えて、私が学びの構造図の中に感情ということを入れ込もうとするのは、デューイが「感情的性質が、知的探求をなすのにも、またこの探究をまともなものにするのにも有意義な動機となるということだけでなく、この性質をもって仕上げられない限り、いかなる知的活動も十全の出来事（一つの経験）とはならない」⁴と言うように、感情は思考や行為の動機であり、常にそれらに伴われて、一つの経験を特色づけるのに不可欠の要素と考えるからである。一人一人に固有の感情は、個人の背景に支えられており、それゆえかえって、自己と環境とのかけがえのない絆を強め、それぞれ独自の学びを推し進める原動力となるのである。

(4) 言語活動

私はここまで、論理的思考と感性的思考の相補性、及び思考と行為と感情の相関性について述べた。これらの要素をつなぎ、相互作用を活性し、子供の学びを力強く推し進めていくために、具体的には言語活動が有効である。

まず言語は論理的思考と感性的思考の両面にわたる。感性的思考の言語化はそれを自覚化・対象化し、論理的思考の俎上にあげることを可能にする。論理的思考は感性的思考に根拠となる視点を説明し、両者の思考が発展・充実していくのである。

また感情は、それが語られる時、それは一つの表現であり、自覚化・対象化された感情は思考の扉を叩く。そして思考の試練を経て感情はより高次の表現へと昇華するのである。

さらに言語活動は、子供の学びにとって重要な、他者との相互作用においても有効な手段である。他者に対する自己の投げ入れは、異質性への挑戦であり、異質な他者によってこそ、自己を振り返り、自己を確かめ、新たな自己を開拓していくことができるのである。

そして言語活動とは学習者相互に交流の通路を開くことであり、したがって、言語活動の意義を深く理解し、十全な言語活動が促進される学びの場では、「行為の協働」「思考の交流」「感情の共感」といった相互作用

用が活発に行われることになるのである。

(5) 対象

木村が「生命にとって唯一の時間は未来への前進」⁵と言うように、私たちが「生きる」ということは、過去から現在に至る歴史的背景を引き連れて、未来へと向かう現在の前進であり、前進ということは、何かしらを目指して立ち向かうのである。つまり私たちは、私たちが生きる上で、常に対象を設定し、そこに向かって自己を試し、抵抗感を味わいながら「生きる」のだと言える。そしてこの時に対象は、文化的素材や社会的素材といったことばかりでなく、問題状況さえも前進のための契機となる。

さらに私は、このような対象を突き抜けた先に、「人間」を想定し、そこに向かう貢献的関与という態度を学校教育全体を通して、子供たちに学ばせていくべきではないかと考えている。ここで言う「人間」とは、最も身近な家族や友人から、最も広い意味で人類ということまで含んでいる。このような学びの中でこそ子供たちは、自己と対象、そして対象の向こう側にある人間や社会全体との絆を確かめ、強め、その中でこそ「生きる」力を培っていくのではないかと考えるのである。

IV 考察

「音楽科教育の学びの在り方」を追究してきた結果、図らずも教科や校種の枠を越えた発想に至った。それはもしかすると当然の帰結であったかも知れない。本来子供の学びは、教科によって区切られるものでもなく、校種によって分断させるものでもなく、一貫してまとまりのあるものだろう。このことは、教科や校種を越えた対話の中から、新たな学びの在り方を問い直していくべきことを私たち教員に要求している。常に差異性に開かれた態度でいることは、自身の自己更新にとって不可欠の要件でもあろう。

私はこの構造図をもって、学校の内部にも、また外部にも、教科や校種を越えた対話の場を築いていきたいと考えている。その差異性を乗り越えた対話の中から、また新たな価値を創造していくことを願っている。

¹ 中央教育審議会(1996)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(答申)」

² 東京都教育委員会(2008)「東京都教員人材育成基本方針」p2

³ 小島律子「音楽による表現の教育—継承から創造へ」小島律子・澤田篤子編、晃洋書房 p5

⁴ デューイ「芸術論—経験としての芸術」鈴木康司訳、春秋社 p41

⁵ 木村敏「あいだ」ちくま学芸文庫 p85